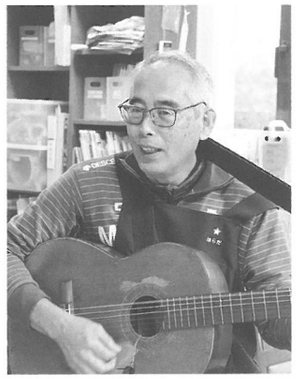
私に人生と言えるものがあるなら



原田文孝

はらだ　ふみたか／1956年岡山県生まれ。兵庫県加古川市で肢体不自由養護学校に31年勤める。教員退職後も障害福祉の職場で障害の重い人たちとかかわり続ける。NPO法人ささゆり会代表

第3回　悲しみは人生を豊かにする

人生の先輩である山本さん

私が施設訪問学級に異動になって初めて担任した3人の内の一人が佐藤さん（仮名）です。佐藤さんは42歳でしたが、一番年齢の高い山本さん（仮名）は60歳を超えていて、人生の先輩でした。山本さんは、就学猶予免除で不就学だったのです。1979年の養護学校義務制実施の時に15歳を超えていたので、就学が認められませんでした。そして、1998年の訪問教育の高等部実施の時には、「義務教育を卒業していないので、高等部の受験はできません」と今度も教育から排除されたのでした。兵庫では、不就学の人たちの「学校へ行きたい」という強い思いを受けとめて、本人や父母、施設職員、教職員が一緒になって県議会へ強く働きかけ、2005年4月より「就学猶予免除者のモデル事業」が実施されました。

そして、2007年4月より「重症心身障害児の就学プラン」が実施され、山本さんは中学部3年生に編入し、高等部教育の3年間と合わせて、4年間の教育が保障されることになったのです。山本さんは、学校へ行くこと、学ぶことを本当に楽しみにされていました。

山本さんは、私に「歩きたい」と言いました。馬蹄形の古い歩行器を借りてきて一緒に歩くことにしました。山本さんは、車いすの生活なので靴を持っていませんでした。私の靴を履いて歩いたのですが、サイズが合わないのですぐに脱げてしまいます。山本さんは、面会に来られた高齢の母親に靴を買ってほしいと頼みました。母親に買ってもらった新しい靴を履いて歩いた山本さんは、本当にうれしそうでした。母親に買ってもらった新しい靴は、山本さんの宝物になったと思うのです。

「足湯で演歌」の授業づくり

「生活年齢の重み」とよく言いますが、実際にはどういうことなのか、佐藤さんを含んだ集団学習「足湯で演歌」の授業を通してお話しします。

この授業は、佐藤さんと出会って2年目の3学期に実施したものです。佐藤さんは、週に2回入浴していたので、お風呂のない日は本当に冷たい足をしていました。お風呂に入れない日は、せめて足湯で温まってほしいと考えました。授業づくりの視点として、次のことを大切にしました。①温かいお湯に足をつける気持ちよさと結びつけて、お風呂文化を伝えようと思いました。温泉・お風呂文化は、温かいお湯に入ってリラックスし、家族や友人と話をしたり、歌を歌ったりしてリフレッシュするイメージなので、そういう雰囲気づくりをしました。②40歳以上の生徒ばかりで、音楽の学習でも演歌を楽しんでいたので、歌を演歌にしました。佐藤さんたちは、長い施設での生活で、喜怒哀楽の感情を溜め込んでいて、この感情と悲しさや寂しさを歌う演歌の文化が出会うことで、心が動くのではないかと考えたのです。③特に佐藤さんには、ゆっくりていねいに足湯に入る流れ（生活のストーリー）を伝えることで、していることの意味がわかり、安心して参加してほしいと思いました。

授業は、はじまりの挨拶をしてから、絵本『もりのおふろ』を読みます。「ごしごし　しゅっしゅっ」のリズミカルなオノマトペに合わせて、佐藤さんの背中に触れていきます。こうした絵本や歌を歌いながら触れていくことは、していることの意味がわかりやすいので佐藤さんは安心して楽しめるようになっていきました。お湯の入った洗面器を出してくると、それを見て期待するようになっていきました。「幸せつくろう」の替え歌の「靴を脱ごうよ」を歌いながらじっくり、ゆっくりと靴を脱いでいきます。いつも足の指に薬を塗られて痛い思いをしているので、足に触られるのが苦手です。初めの頃、靴を脱がそうとすると怒っていましたが、靴を脱ぐ意味がわかり、歌の楽しさもあり、落ち着いて靴を脱いでいきます。同じように「靴下脱ごうよ」で靴下も脱いでいきます。温かいお湯に足を入れると、本当に気持ちよさそうで、しばらくじっと味わっているようでした。

演歌とともに

冷たい足が温まってきたところで、演歌を歌います。1月は「津軽海峡冬景色」です。施設では、月2回の面会日があります。家族は、お昼ご飯を一緒に食べて午後に帰っていきます。別れの寂しさをいつも感じていると思うのです。「津軽海峡冬景色」のさびのところの「さよならあなた　私は帰ります」の歌詞を別れの寂しさと重ねて歌います。佐藤さんは歌いませんが、さびのところで「あ～あ～」と大きな声を出して歌う人が何人もいます。雰囲気が盛り上がります。こ